

本書は、19世紀はじめのドイツで活躍した哲学者ヘーゲル(1770-1831)の主著『大論理学』(1812-16)の研究書です。ヘーゲルの主著としては1807年に書かれた『精神現象学』の方が有名ですが、ヘーゲルが生涯で書いた本の中で最も分厚い本は、実は本書で扱った『大論理学』です。『精神現象学』もとても難しい本ですが、ヘーゲルはある個所で、『精神現象学』を『大論理学』の入門編と位置付けています。この意味で『大論理学』はヘーゲル哲学の「本丸」と言えます。本書には「ヘーゲル哲学体系の核心」という攻めた副題をつけていますが、これは『大論理学』という書物のことを指しています。

本書を書くときに目指していたのは、「自分が大学4年生だったころに読みたかった本」を書くことでした。専門家に向けて書いた研究書ですので、哲学に全く触れたことのない方がいきなり読むにはハードルが高い本にはなってしまいます。それでも、なるべくわかりやすく、哲学科で一通りのことを学んだ学生が、ヘーゲルについて本格的に学ぼうと思ったときに手に取ってもらえるような本にすることを目指しました。

哲学史研究には、大きく分けて二つの目標があります。ひとつは、過去の哲学者についての歴史的な事実を明らかにすることです。発見された手書きのノートがヘーゲルの自筆かどうかを調べるような文献学的な研究や、過去の複数の哲学者たちの間の影響関係を明らかにするような研究は、この目標を特に重視した研究といえます。これに対して、もう一つの目標は、時が隔たっているために一読しただけでは十分に理解することが難しい、過去の哲学者の本に書かれた思考の内容を、なるべく正確に理解することです。正確な理解のために有効な方法は、逆説的ですが、現代の哲学で議論されていることと比較し、その文脈の中にヘーゲルの議論を置いてみることです。たしかに一方でこうした研究には、慎重にやらなければ、本来なされていない現代的な議論を過去のテキストに読み込むというアナクロニズム(時代錯誤)に陥る危険もあります。しかし他方で、私たちがいま使っている言葉で過去の哲学者の思考を言い換えられたときに、そのテキストを最も深く理解できたことになるというのも事実です。実はヘーゲルという人は、哲学の研究者の間で、過去の哲学者の中でも特に難解な文章を書く人として知られています。本書では、私自身が慣れ親しんでいる現代の言葉で、ヘーゲルの言葉を必ずパラフレーズするよう心掛けました。その作業によって、自分自身のヘーゲル理解が最も深まり、また、ヘーゲルの議論に現代の哲学者たちがアクセスしやすくなると信じているためです。

本書の内容を少し詳しく紹介しましょう。本書は三つの部に分かれています。第1部では、「人間は何をどのように知りうるか？」と問う認識論と「世界には何がどのように存在するのか？」と問う存在論のどちらがより基礎的な哲学研究なのか、という、哲学においてしばしば問われてきた問いを扱っています。私の理解では、ヘーゲルの答えは「どちらでもない」というものです。そもそも、認識論と存在論のどちらかが他方を基礎づけることができる、と考えること自体が間違いのもとであり、そのような企てはすべて失敗する、というのがヘーゲルの見立てです。私たちは基礎づけの誘惑を断ち切って、バランスを取りながらやっていくしかない。このような立場を本書では、「全体論」と呼んでいます。

第2部では、ヘーゲルが『大論理学』で科学について論じていた、ということ指摘しています。ヘーゲルが活躍した時代である19世紀初頭の科学は現代から見るとまだまだ間違いだらけのものでした。ヘーゲルも、現代から見ると間違っているといかないような様々な科学理論を信奉していました。それにもかかわらず、ヘーゲルは科学と哲学の関係について興味深い議論を提示しています。それは、かみ砕いていえば、科学と哲学は「持ちつ持たれつ」の関係である、ということです。このヘーゲルの視座は、200年の時を経て科学が格段に進歩した現代の私たちにとっても示唆的なものだと言えます。

第3部では、心と身体はどうかかわっているのか、という、哲学で「心身問題」として知られる問題を扱いました。『大論理学』では、心身問題は目的論的な関係として考察されます。この関係は、カール・マルクスの『資本論』の中に、「労働過程論」として取り入れられたことでも知られています。マルクスのような解釈はヘーゲルの議論の応用として示唆に富んでいます。本書ではしかし、ヘーゲルの本来の眼目は、労働のような社会的・経済的な議論を展開することではなく、あくまでも理論哲学の問題としての心身問題を扱うことにあった考えるべきだ、と論じました。さらに、この観点から、ヘーゲルが「生命」の概念に心身問題を解決する力があるはずだという期待を寄せていたことも明らかにしました。

本書には、ヘーゲルの生まれ故郷のドイツだけでなく、アメリカやイギリスといった英語圏で展開されてきた比較的新しいヘーゲル研究の潮流に光を当てているという特徴もあります。本書を通じて、ヘーゲル哲学や、英語圏のヘーゲル研究の魅力を感じていただければと思います。